昭和33年3月15日　第三種郵便物認可　平成元年7月15日発行（7月号）通巻第437号　毎月15日発行

新潟県

平成元年

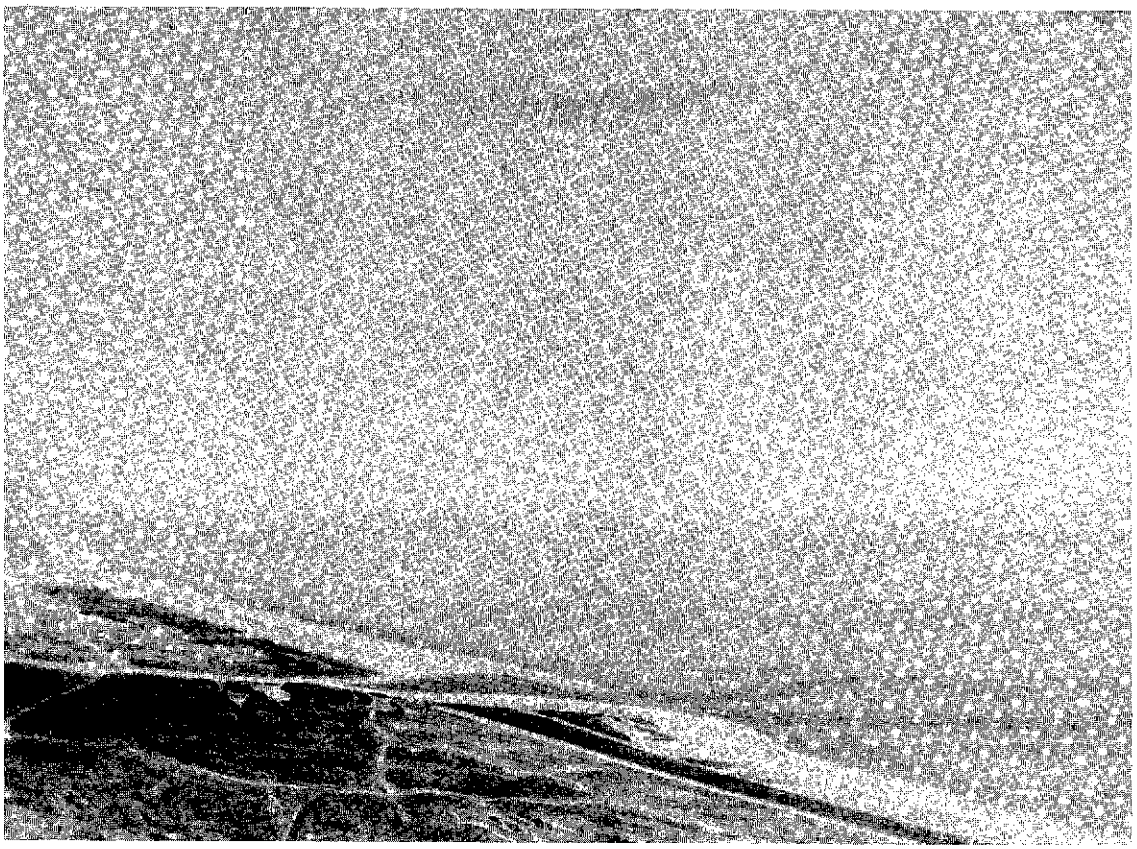
公民館月報

7月

第437号

シリーズ　生涯学習と推進と公民館(2)

公民館の役割・機能



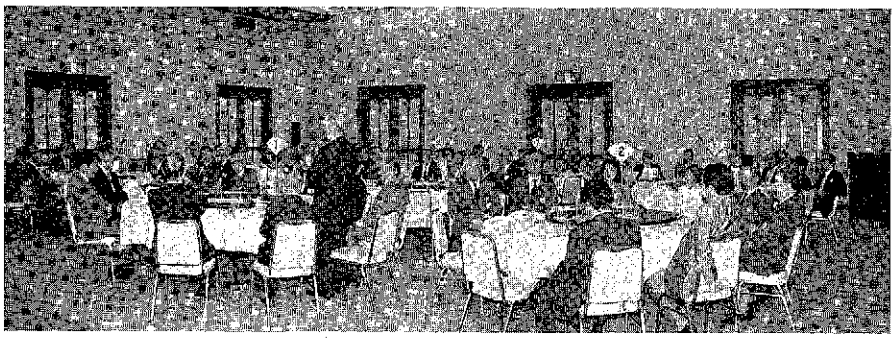
五十嵐　二朗　「越後海景」
1986年制作　105.0cm×138.0cm
水彩キャンバス
新潟県美術博物館所蔵

五十嵐二朗（1931～）は佐渡郡新穂村出身。越後や北海道の風景及びヨーロッパ風景を描き続けている。水彩絵の具の特徴を生かし、淡く清らかな色調で、広大な大地や平原を詩情豊かに描写している。

草創期の公民館を語る会

若き日の燃焼を再現

旧交を温めあう七十余人



開会あいさつに立つ安沢純正氏

去る六月十日（土）十二時半から、新潟市の東映ホテルを会場に、『草創期の公民館を語る会』が開催された。

この会は、今年が社会教育法施行四十周年に当る年であることから、草創期に苦労を共にした県下の公民館関係者が一堂に会し、往時を偲ぶとともに旧交を温めあう機会にしようという趣旨で開いたもの。

元本会会長の安沢純正氏（刈羽村村長・刈羽村公民館長＝当時）が発起人代表となって、県内の関係者に広く呼びかけて実現したもの。この日六月十日は社会教育法施行の日という念の入れようであった。

〝草創期〟を昭和三十四年の社会教育法一部改正までの十年間としたものの、趣旨に賛同した面々は、昭和二十年代、三十年代はもとより四十年代の関係者も集まるほどの盛会を呈していた。

参加者総勢七十余名。草創期のいわゆる公民館運動に情熱を燃焼した顔々、どの顔も使命感に徹した、自信と充足感に満ちあふれた表情がみなぎり、老いてなおかくしゃくとした人たちの集まりであった。

編集子の心を打ったのは、草創期特有の〝使命感〟の旺溢もさることながら、県内の隅々に至るまでの〝同志的結合〟の強さをかいま見たことである。特に、県（職員）と市町村との垣根を払った一体感こそが草創期を充実させたものにしたのであろうという印象を深くしたことであった。ひるがえって今日の県公連体制に示唆を与えているように思われた。

閉会に当り、緊急動議が出され、この「語る会」を今後に継続してほしいと提案され、万場一致で採択されていた。

この決議まことに結構なことではあるが、願わくは、「草創期」にのみ限ることなく、もっと対象を拡げて、編集子などの後輩も正会員として参加できるような「語る会」にしてほしいものである。

（上村記）

関ブロ公連理事会

去る六月一、二日、茨城県大洗町、大洗ホテル（関ブロ公研集会の宿舎となるところ）において、今年度第一回理事会が開催された。

この理事会の主要議題は「第30回関東甲信越静公民館研究集会」の具体的な実施内容の検討にあった。

第30回関ブロ公研集会 第八分科会（高齢者部会）の三役を新潟県で

テーマは『生涯学習を進めるための公民館の役割』で、九月六日(水)七日(木)の二日間にわたり、水戸市県民文化センターを会場に開催される。分科会は十五分科会から成っている。

ちなみに、第八分科会高齢者の学習活動部会は発表、司会、助言の三者を当県でまかなうもので、次の三氏がすでに委嘱されており、その活躍が期待されている。

第八分科会
―高齢者の学習活動部会―

討議内容
○高齢者がかかえる課題と学習活動
○高齢者の組織と役割

発表者　西蒲西川町公民館長　**田子了秀氏**

司会者　中蒲村松町公民館長　**宮嶋昌世氏**

助言者　中頸大潟町公民館長　**渡辺之夫氏**

全公連総会終る
会長代行に石井耕一氏

六月九日、東京青山会館で、社団法人全国公民館連合会の総会が開催され、本会からは木下清一会長が出席した。

この総会は定例総会であることから、前年度事業報告と収支決算の報告承認案件、並びに今年度の事業計画、予算案審議などの案件は、原案どおりそれぞれ満場一致で可決承認された。

今年度の特に重要な議題は、役員改選にあった。とりわけ、会長横山正人氏、常務理事（事務局長）谷口正幸氏の永年重任をさける意味からの辞意表明を受け、後任人事の選考がなされたことである。選考委員が選出されたものの、この機会に全公連の活性化を図る必要から、会長人事は慎重を期すべしとし、拙足をさけ、後日の理事会で選考することとし、結論は先送りされた。

その結果、現副会長の石井耕一氏（本県公連元会長）が会長代行に、また、谷口事務局長は現職のまま後任決定まで事務を執ることとなった。

辛口

竹下内閣の目玉政策である「ふるさと創生」の一億円の使い途をめぐって、現在全国の自治体のうち、使い途が決まったところが約四割で、残る六割は住民アンケートやプロジェクトチームなどを組織し、目下検討中といわれています。

制度で交付される国の補助金交付金とは別に、突然のように「一億円を交付するから、ふるさとの発展のために使ってみよ」といわれるといささか戸惑いがあります。元来、ふるさと創生などという地域おこしは、そこに生活している人々でなければ地域に根ざした発想は生まれてこない。また、地域の色々な条件や住民の意欲と適合しなければ、実施しても期待される効果は挙がらないものです。

当市は、昔から溝口藩の城下町で、歴史があり、また、市民が育てた文化では、市民ぐるみの緑と花いっぱい運動や音楽がありまず。

これらを、ふるさと創生事業の基調に据えた政策を市民に提示していることは周知の事実でありますが、これらの学習活動は、主に教育行政のうえから社会教育の枠で据えているようであります。今後、学習活動をいっそう発展させ、生涯学習が充実し、まちづくりへとつなげていくためには、単に教育行政にとどまることなく一般行政と連動した総合行政の中で生涯学習の充実を図っていくことが課題ではないでしょうか。その意味で公民館活動がまちづくりの推進力となっていただきたいと思います。

（県公振連副会長）

まちづくりは人づくり
新発田市長 近寅彦

意見を求めているところですが、ふるさと創生事業は視点を変えると市民が自ら考え、自ら実践する「まちづくり」「人づくり」であります。いま、生涯学習社会を迎えて、多様な学習活動が展開されて

職員の士気と資質 それこそ公民館の生命

社会教育法施行40周年にあたる6月10日、新潟市で「草創期の公民館を語る会」が開かれた。

受付で指定された私のテーブルは、思いもかけなかったメーンテーブルで、そこには法施行当時の県社会教育課長・吉川浩次先生をはじめ、この会の実行委員代表の安沢元県公連会長、そしてつい先日、全公連会長代行になられた石井耕一元豊栄市長、来賓等がおられた。

○

会は物故者への黙禱に始まり、安沢代表の挨拶そして参会者一同の自己紹介となった。

この自己紹介で私は「きたる7月7日、長岡市で開かれる第40回県大会のパネル討議で、今日の息吹きをぜひ伝えたい。」との言葉を添えた。

自己紹介の最後に全員を代表して吉川先生が回想を述べられ、「とに角あの頃は皆が若かった。そして皆が共に燃えに燃えた。」と結ばれた。

○

私は安沢さんの脇に座らせていただいたが、この安沢さんが県公連の会長であった昭和34年に、県公連は社会教育法制定10周年記念論文の募集をした。

この募集に私は、「新潟県公民館職員通信教育講座の開設を提案する」と題する論文を応募したが、この論文は思いがけずに入選第一席となり、この論文の提案が契機となって、県公連と県教委共催の県下公民館職員講習が、新潟駅前の青年の家で一週間にわたって開催された。

この時の受講生仲間であった岩室村の小池君と、このたびの会で久しぶりに会い往時をなつかしんだ。

○

この時の論文には、公民館活動への評価は「教育的に評価されねばならない。」ということに気付いた当時の私の、研修への切実な願いと意欲がこめられている。

7月7日、県公民館大会のパネル討議で私はぜひ、公民館の基本的な課題として、「職員の士気と資質こそ公民館の生命」を、皆に訴えたいと思っている。

（柏崎市中央公民館 元事務長・徳間助夫）

続公民館日記（3）

推進と公民館（2）
割・機能
る視点

教授　吉川　弘

中教審答申（昭和56年）は生涯学習を「人々が自己の充実・啓発や生活の向上のため、自らの意思に基づいて、必要に応じ、自己に適した手段・方法を選んで、生涯を通じて行うもの」と述べている。生涯学習の一般的定義ととらえてよかろう。

この定義に含まれているように生涯学習の特質は、まず、人々が、いつでも、どこでも学ぶことが出来るということである。「生涯教育」が一九六五年ユネスコの会議でとりあげられ、世界の各地で論じられるようになるが、この「生涯教育」の特質をユネスコの専門職員であったクロプリィは次のように説明している。(註1)

「七歳から二十五歳までに集中して教育が行われるのでなく、ひとりひとりがその全生涯にわたって組織的、目的的な学習がなされるよう配慮されなくてはならない。」

生涯教育とは、第一に、人々がいつでも学べる体制をつくることなのである。クロプリィはつづいて次のようにいう。

「かつて生活は教育の源泉であった。日常生活の中の人々との接触から処世術を、巧みな職人から職業技術を習いおぼえるということであった。これが仕事や社会生活が複雑化して教育の専門家や専門機関が生れた。そして今度は、社会がより急激に変化していくと、この専門機関で習いおぼえたことが使えなくなっていた。そして人々は、むしろ工場や商店、組合、教会、地域団体、政党など、とにかく学校以外の生活場面に教師を見出だすようになった。学校外の教育機関としては、博物館、動物園、美術館、教会、コミュニティセンター等も地域に存在する。教育を生活に結びつけなければならない。」

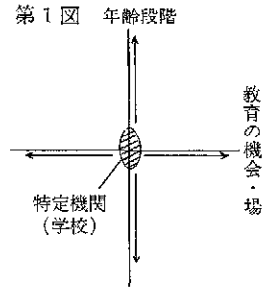
教育関係施設・機関連携の中心に

第二に、生涯教育とは人々がどこででも学べるような体制をつくることなのである。

これを図示してみると第一図のようになるであろう。ある年令層をとらえた特定機関での教育を、すべての年齢層を対象に、あらゆる機会・場で学習できるように拡大していくことである。

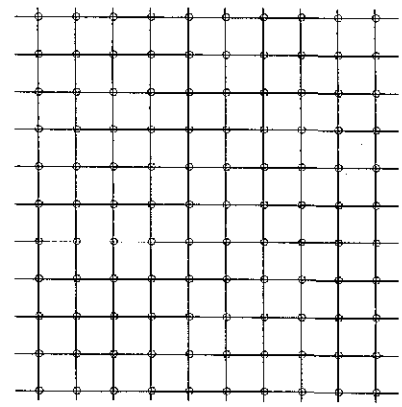
ところで、人々がいつでも、どこでも学べる体制とは、どのような体制であろうか。それをクロプリィは「網の目組織」といっている。第2図のように、人生の各時期（縦の線）に、いずれかの機会・場（横の線）で学習できるように網の目的に学習の機会と場（結節点）が用意されていることが肝要である。この網の目組織は具体的にはどのようなことなのであろうか。

第1図



その前に現行の教育体制を考えてみよう。現行の教育体制は縦割りである。そしてよくいわれるように重複と欠落が多い。学習者にとってみれば学習の機会と場は過不足の状態にある。例えば、家庭教育に関する学習の機会と場は教育委員会関係のものもあれば尼生部局のものもある。健康に関する学習の機会と場は教育委員会関係のものもあれば保健衛生部局のものもある。産業に関する学習の機会と場は商工労働部局のものもあれば農林水産部局のものもある、といった具合である。かと思うと、自分が学びたいと思っている学習の機会と場はいくら探しても見当らないということもよくきかされる。現行の教育体制には重複と欠落がよくあるのである。これをどう解決したらよいか。教育事業はすべて一本化してしまったらどうであろうか。しかし、これは容易なことではない。一本化はとうてい困難である。それに、各部局の教育事業はそれぞれに特色があり、効果をあげている。要は、各事業間に連絡と調整が行われ、重複や欠落がなく、全体としてまとまっていれば良いのであろう。参加者はA部局のものを学び、つぎの機会にB部局のものを学び、またつぎの機会にC部局のものを学ぶ。こうして常に必要なことをその都度その都度に学んでいくことによって生涯学習が達成するのである。

第2図



ここで問題になってくるのがこの連絡・調整をどこが図っていくかである。行政機関である教育委員会と市町村長部局との連絡・調整は教育委員会がその任に当ることになろう。そして、教育関係施設、機関相互の連絡・調整の任は中央公民館に期待されよう

多様な学習要求への対応

生涯学習を推進していく上で、公民館は教育関係施設・機関間の連絡・調整役で終るものでないことはもちろんである。その重要な役割・機能として、自らが教育機関として教育事業

県ぐるみ大きな輪になれ交通安全（夏の交通事故防止運動）

シリーズ　生涯学習の公民館の役
――事業を考え

新潟大学

を展開していかねばならない。

ところで、生涯学習の特質は、「いつでも、どこでも学ぶことが出来る」ということに加え、「自ら求めることを自らに適した方法で学ぶ」ことがあげられる。学習はもともとパーソナルなものである。特に近代社会にあって人々は共同社会から離脱し、個々人の生活の充実を図っていく。また、いかねばならない。一万人の人口があれば、一万の個々の生活があることになる。実に多様である。個々人の生活が多様であることは、それを充実させるための方法・手段も多様であり、その方法・手段を身につけるための学習も多様になるのは当然である。学習要求調査をすると、望む学習の内容はもちろんとして、学習の方法も実にまちまちである。どの項目も小さい割合だが、いずれの項目にも希望が寄せられるのである。このような状況にどう対応したらよいのであろうか。

一には、出来るだけ多くの学習の機会を提供することである。

学習の機会はこれまで以上にふやしていかねばならない。と同時に、学級・講座・諸集会等について工夫していかなければならない。公民館職員はこれまで以上に頑張らねばならなくなる。しかし、そうはいっても限界があろう。そこで先ほどの各教育関係施設・機関の連携ということにもなるのである。それでも対応しきれないであろう。

そこで、二つに、学習に関する情報提供を行うことになる。

学習に関する情報……施設、事業、グループ、指導者、教材等に関する情報を集め、提供していく。それには公民館内にデータバンクを設置することを考えてもよい。また、学習情報の提供は、広報紙はもちろんとして電話や面接による相談も行われるようになる。こうなると公民館職員は図書館司書のようなレファレンスサービスの知識・技術の習得も必要になってくる。

三つには、グループ・サークルの育成である。近頃の傾向として学級・講座の参加者が減少している。これまで学習といえば学級・講座に参加することであった。最近はグループ・サークルで、即ち、気のあった数人の仲間で、という傾向が強い。こうなると、これからの公民館活動はこれまでのような大きな団体の育成ばかりでなく、グループ・サークル（小集団）の育成にも努める必要がある。

そして同時に、個人学習の援助である（四つ目）。これまでも個人学習を援助する社会教育施設として図書館、博物館があった。これら図書館、博物館の活動をさらに一層充実させていくとともに。公民館においても学習相談、レファレンス・サービスを充実させ、個々人の学習を援助することである。なお、個人学習の援助をさらに深めていくため、今後は通信教育やCATVなども考えられよう。

学習の啓発

広島大学教授池田秀男氏によれば[註2]「生涯学習は、人生の全段階（life long）を通して、しかも全生活関連（life wide）において行われ、かつ究極において各人の自発性と主体性に依存する」という。「各人の自発性と主体性」に基づく学習とは「自己管理的学習（self・directed learning）」といわれる。同氏の定義では「多様な教育資源を利用しながら、自らのイニシアティヴと責任において計画、実施する意図的学習」である。この自己管理的学習こそ生涯教育を達成する中心的戦略と説かれている。

さきの中教審答申の「生涯学習」でも「自らの意思で」、「自ら選んで」という文言が入っている。自発性と主体性こそが基点である。生涯学習に関する調査で気づくことには、「生涯学習は必要」という答えは八割に達する（総理府、昭和63年調）が、実際に学習している人は約四割である。問題は「学ぶ意思」である。いかに学習を啓発し、動機づけるかにある（五つ目）。

この学習の啓発であるが、かつて生涯教育の先進県といわれる秋田県を訪問した。この地で注目させられたのは生涯教育推進員の活躍であった。人々の身近かにあって「学習の啓発」に当るのである。公民館職員自らが学習啓発に当ることも重要な任務であるが、同時に学習ボランティアを養成し、これら学習ボランティアによる学習啓発を進めていくことも効果的であろう。

註1　拙著「現代社会教育の展開」文教書院、24～25頁

註2　池田秀男「生涯教育推進システムとは何か」（日本生涯教育学会年報第6号）

註3　小畑勇二郎「秋田県の生涯教育」全日本社会教育連合会

次号お知らせ

次号から、このシリーズは、実践事例の紹介にうつる。

事例の提供をうけるのは次の六市町村公民館（社会教育課）である。

○新井市　○能生町　○浦川原村　○三条市　○川口町　○水原町

これらの市町村は、昭和六十三年度に、国の補助による「生涯学習推進市町村モデル事業」を実施し、さらに、平成元年度も継続実施しているところである。

いずれの市町村も、先導的な立場で、関係部課の啓発も含めて、試行錯誤を重ねながら、生涯学習推進の基盤整備と取り組んでいるもので、その努力の姿を紹介したいと考えている。また、吉川論文との関連を持たせる必要から、編集子の独断的探訪記事風な内容になると思うが、ご寛容いただきたい。

危険です寝不足追い越し飛ばし過ぎ（県・市町村交通安全対策協議会）

草創期を思う

草創期の公民館を語る会に参加した方々のうちからアトランダムに、当時をつづってもらいました。

回想を徒にしまい

松本　十三男

集いは、良寛の歌「何ごとも移りのみゆく世の中に花はむかしの春にかわらず」で始まった。そして、萬歳までの三時間余はアッという間に過ぎた。

過去のことを語りたがるのは老いのしるしであるという。この度の集いは、過ぎし日に思いを致し、当時の「花」を語るためのものであった。されば、老人達の集まりであった、と言えようか。

一方、歴史を認識しない者は将来を語ることができない、という言葉がある。公民館の将来を語ろうとする者は、その歴史を正しく理解しなければならない、といえる。

今度の集まりのメンバーは、公民館草創期の混乱（それは敗戦、占領下、価値観の転換に直面した世相の混乱でもある）を生き抜くという歴史の現場にいた者である。

人間にとって、その人生は作品である、という。歴史は史家によってのみ書かれるものではない。その現場に立ち会った者の言葉こそ歴史であるはずである。

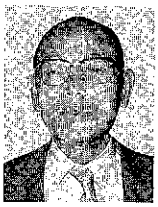
かつて本誌に、「あの頃のこと」が連載された。エピソードの紹介にとどまらず、将来に生きる者への歴史の証言を発掘するような企画があっていい、と思うのだが、どうだろうか。

（旧見附町公民館）

使命に燃えた頃

亀山　末松

公民館活動が始まって四十数年を経た今日、苦労した当時を語るという発想からの会、よろこばしく楽しい一日でした。



先ず、当時の公民館長さん（老齢故欠席）の一文から紹介したい。「当時のことを思い起しますと小生の所では役場の片隅が教委の事務局であり、そこが公民館でありました。看板などかけようもありません。業を煮やして正面玄関へ役場の看板より大きいのをかけて、ごまめの歯ぎしりをしておりました。大蓮寺を借りて泊りがけで催した青年研集会などは、公民館人の情熱の発露と申すべきか…。」（後略）

真に然り、草創期は全く整わない状況の中に、新しい時代創成のための活動、それは関係職員の熱意による他ない姿であったと申して過言でない有様。

会場にて、当時の社会教育課長吉川先生の回顧談は「民主化のための活動に関係の皆さんが燃えに燃えた活動であったと言う以外のなにものでもない。」と申されたが、この一言に尽くされた姿であったことに、頭の下がる思いでした。

同憂同喜の者が手をつないで励ましあった。この心の通った人達が、久方振りに元気に遭えた悦びは大きかった。過ぎた苦労は楽しい思出であり、その稔も決して少なくないことも……。

（県教育庁西蒲原郡出張所）

茶の間から村づくり

神蔵　政雄

草創期の公民館を語る会に出席して、戦後の混乱した時代の中で公民館活動を推進した方々の懐かしい顔がみられ、永い歳月が昨日のような感がした。当時は施設もなく、教材もない中で一人で企画、立案、実施と、スーパーマーケット的内容で行事を展開した。娯楽もない時代でUICフィルムを持ち、ナトコ抱えて分館巡りをし、設営から機械修理迄自分でやらねばならなかった。講座を開けば多くの若者が集り、中でも洋裁講座、生花講座、珠算、書道講座は万員の盛況であった。当時の公民館職員は、住民と一体になり、持込れる相談、分館活動の企画、推進の助言、村全体の「ふれあい」の場として、盆踊大会、演芸大会、村民運動会等、村をあげて参加し、たえず人々は公民館に足を運び、公民館は茶の間的役割をはたした。

対談の中から求めるものを探求し、行事の展開を計った。県の先生方とは友達仲間となり、困る時は助言を頂き、公民館運営の方向をあやまらないようにした。

今ふるさと創生論が出されているが、地域住民と行政とががっちり手を握り、住民相互の人間関係と連帯を計り、住民の幸福と、地域開発に公民館は眼を向けねばならない時である。

（旧吉井村公民館）

教育委員会発足のころ

建部　利彦

横越村公民館に勤めるようになって、一年ちょっとして教育委員会制度が発足した。昭和二十七年である。公選制の委員会で、教育の独立性、中立性を守れる制度で、予算の提案権もあり、社会教育にたずさわる一人として大いに期待したものである。当時は、民主主義の学習、未来をになう青少年の教育、社会問題としての二三男対策等が課題の一つであった。自主的な青年団活動も、もりあがっていた。夜学会から青年学級振興法の青年学級が発足したりした。

しかし、公民館の活動の領域はせまく、公民館の振興をどうはかるかなどが熱ぼく語り合われた。

町村の公民館職員の仕事の原動力は、県の主催する研修会、県下各地の町村どうしの交流、

情報交換によって支えられていたように思う。

こんな事を書いている内に、年月、人間のいとなみ、はかなさなどしみじみ感じさせられた。

先の昭和天皇の崩御により昭和六十三年間の懐古、今この原稿を書きはじめ戦後社会教育の四十年、温故知新と言うけれど、私の乏しい知識、経験から見ても、日本のこと、東洋のこと、世界のこと、社会一般、政治一般、あまり進歩はなかったような気がする。淋しい限りである。

（横越村公民館）

公民館の有要性を高めてほしい

内山　嘉雄

私、昭和二十四年社教法に拠る公民館の専任職員でした。

草創期の職員は、県社教職員も含めフロンティヤスピリットに似た情熱をもって討論、研修を重ね、昼夜活動を展開しました。

図書室の創設（後の市図書館）社会体育・文化財・生活改善等々、二十七年に教委が設置されるまで、二人位の職員で、よくやってきたと思います。

私が一貫して進めたポリシーは、戦後の町づくりの根基となる民主的な人づくりでした。

そのため、非力な公民館は他の社会機能との連携協調を重点に、専門機関の媒介者として地域的総合体となることでした。

六年程で異動、七年後に戻りましたが、前述ポリシー実現の必要性を一層強く感じました。

今日は社会教育機能の分立で「ライバルが多くて困る」という人もいますが、公民館はカルチュアセンターではありません。

学級・講座も大切ですが、公民館活動は、地道でもその地域に顕在する日常的な生活課題に取り組み、その問題解決のための「実生活に印する教育活動」こそ、本来的使命と思います。

そして、この活動は本音で話しあうことから始まります。

スペースがないので詳述できませんが、機会があれば拙意を記したいと思います。　以上

（小千谷市公民館）

階段下の事務室

磯部　富美子

終戦を村上で迎えた私は、そのまま約十五年ほど村上市に在生した。新潟市で生れ育った私だが、村上は第二の故郷でもあった。

さて、改めていま歩いてきた道を振り返ると、まず想い出すのは、村上小学校（旧校舎）の三ノ町側校舎の端で、しかも二階への階段下の公民館事務室生活である。

いまは亡き小杉説次郎氏が上司で、現在村上市中央公民館長の滝波善助氏と共に公民館事務や事業に専念していた時代であった。

自転車を覚えようと、夜の校庭で懸命に練習し、両足を紫色に腫れあがらせても、遂に乗れなかった不器用ぶりで、近所の方から毎晩校庭でドスン〳〵と音がしていたが…と言われ、陰で首をすくめたものだった。

また、真冬のある日直の朝、膝も没する雪を除けながら汗びっしょりで漸く階段下の事務室入口にたどりついた想出もある。また文化講演会講師や音楽会の出演者を毎年中央（東京）から招いて住民に喜ばれたものだったし、あの頃は正職員の女性は少なく、勉強の機会にと県内外の各種研究会等に館長のお供でよく参加させていただいた。

公民館事務室は階段下でも、伸び〳〵と大きな事業をやった想出は懐かしく、つきない。

（村上市中央公民館）

素顔拝見

川西町公民館社会教育主事　高井　敏氏（30歳）

町建設課に四年間勤めた後、公民館勤務となって一年目。とは言っても、学生時代に社会教育主事の資格を取得。大学卒業後は、三年間町の社会教育指導員として社会教育にかかわっておられたベテラン。

「四年間の出稼ぎをどうにかこなし、念願かなって（?）、再び社教の地に戻って参りました。」と、さわやかな返事がかえってきた。社会教育主事として、「事業の全般にわたって目を向けていなければならないので、かなりきびしい」状況のようだが、係長以下、公民館（社会教育）関係職員が比較的若いので（経験が浅い）、みんなで話し合うことを大切にしている。ベテランであるが故に理想と現実のギャップにとまどいもあるという。公民館は町民の〝茶の間〟と言われるようにしなければ。と現施設体制での不満もチラリ。

（十日町市公民館

社会教育主事　小林宏行記）

糸魚川市今井公民館委嘱主事　斉藤　京子さん（40歳）

「お早うございます！今井公民館でございます！」と、電話の向うから斉藤さんの明るい声が聞こえてくる。

彼女は、いつもバイタリティあふれる行動力で、今井地区公民館を今日にまで盛り上げて来たと言っても過言ではありません。そればかりでなく、糸魚川市全体の公民館の女子職員の間でもリーダー的な存在で、頼りになるお姉さん（?）でもあるのです。

これまで、公民館の活動に携わってきて思うことは、事業を進める側に地区民を思う熱い心がなければ住民は動いてくれません。いくら「自からの学習意欲が高くなければ…」と言っても職員の意欲が無ければ以心伝心で結果は火を見るより明らかです。彼女が事業の一つひとつを大切にし、相手を思いやりながら生事をこなしている姿にはいつも敬服しています。

（糸魚川市大野公民館委嘱

副主事　谷口紀子記）

ネットワーク

青年の館 花火を見ながら ふれあいタイム
能生町青年団体連合会

西頸城郡能生町の布引台地にライトブルーの屋根の目立つ「青年の館」がある。

町当局の後継者対策の一環として、若者たちの日常的交流の場にと、昨年12月に竣工したものである。若い人たちの活力と情熱に期待し、設計も、建築協力者への働きかけも、青年たちに任せたとあって、アイデアに富み、夢と希望にふくらんだ施設である。

しかも、特徴的なことは、町委嘱の「結婚相談員」なる人たちの側面的な協力が大きかったことであるという。過疎地ならではの問題が潜んでいるのがこの「青年の館」にこめられている願いであろう。

能生町には、旧来の青年団が活躍し「青団連」として町民に存在感を持っている。（このことについては機会を改めて紹介する予定）いま、「青年の館」は、イベントの場に、交流の場に、と青年たちのオアシスとなっている。

ちなみに、来る八月六日には、上のイラストで紹介するイベントが開催されるという。

〝夕日の中でご対面！〟

〝花火を見ながら告白タイム！〟

というキャッチフレーズのもとに花火大会をメーンにした夏の夜のふれあいイベントである。

関心あるむきは参加してみてはいかが。但し、主催者は30人程度の参加者を予定しているということだから、改め事務局に問い合わせてからの方がよいだろう。

NYK（能生町有線放送電話協会）ゆうほう150号から転載

新潟県高齢者大学開校記念 高齢化社会 シンポジュウムへのお誘い

新潟県（民生部高齢福祉課主管）では、今年度新規の事業として「高齢者大学」を開設することになった。このことについては、市町村の高齢福祉担当の窓口を通して周知されているところであり、受講申込みの受付についても、すでに六月三十日で締め切られているところである。

このたび、この高齢者大学開設を記念して『高齢化社会シンポジュウム』開催される。このシンポジュウムは、高齢者大学の参加者のみではなく、誰でも参加できることになっている。振って聴講をお薦めする。

～新潟県高齢者大学開校記念行事～

高齢化社会シンポジウム

大学の開校を記念してシンポジウムを開催します。どなたでも自由に参加できます。（入場無料）

○テーマ○「輝けシルバー！ いざ地域社会づくりへ」
～高齢者の自立と社会連帯を求めて～

○日時○ 平成元年7月26日(水) 午後1時

○会場○ 新潟県民会館大ホール

○基調講演○ 俵 萌子 氏（作家・評論家）「今日がいちばん若い」

あとがき

◇七月七日、第40回県公民館大会が盛会裡に終了しました。細部の紹介は来月号にゆずるとして、参加者が八百名を超えたことだけでも近年にない盛り上がりと言えましょう。いうまでもなく、主管の長岡市中央公民館の関係者の一致協力による取り組みによるものです。また、全県の公民館関係者の協力によるものです。哀心から感謝の意を表します。

◇うっとうしい梅雨のむし暑さともいよいよおさらば、夏の学習やイベントの最盛期がやってきました。健康にご留意の上ご活躍ください。（上村記）

発行所　新潟県公民館連合会
【新潟市川端町2－9・県林業会館内】
【電話・新潟（025）224－6073】
発行人　会長　木下清一
編集人　事務局長　上村捨二郎
【定価1部 120円 〒共・年極 1,440円】